

# 仏祖の心

黒田大圓

人間は誰しも、一生けん命に取り組むべき仕事を選ぶ時には、人それぞれ様々なきつかけがあります。私は一介の僧侶ではありますが、この道を指し示してくれたのは師匠でもあります私の父でした。すでに七年前に亡くなっておりませんが、その父の幼い頃の話は、少なからず私に波紋を呼び起こし、次第に大きな輪を広げてきたように思います。

父は三歳の時に父親……私の祖父になりますが……を亡くしております。むかし、雪の降る淋しいお葬式の日の話をしてくれた事がありました。

秋田の冬は雪が深いんですが、その雪道を、わらじ

を履いて笠をかぶり、母に手を引かれて行った凍えそうな野辺の送りの情景を、父は忘れられなかったんです。幼い胸に刻みつけられた無常観というものが、後に父が仏門に入る事を決定づけたと思えてならないのです。そして、少なからず私も、それを受け継いだと感じて居ります。

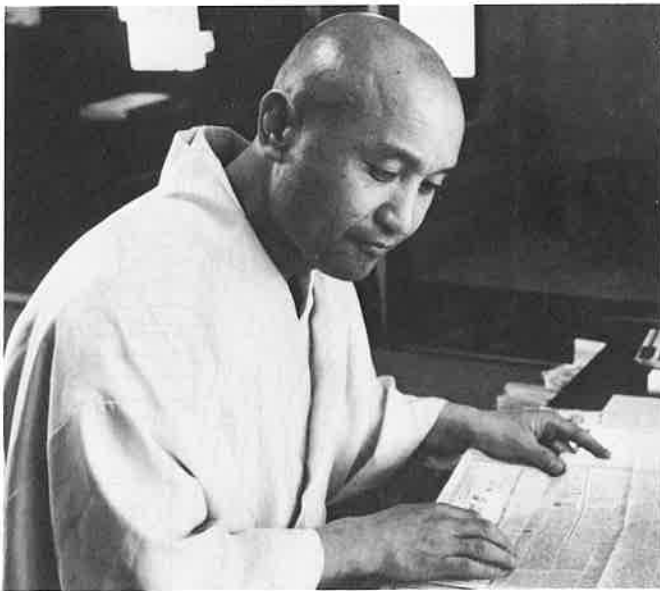
縁あつて僧侶となり、こうして皆様にお話をする機会を与えられましたが、私も迷いの多い求道者であります。ただ、仏祖のこころと言葉を、一生けん命皆さんと一緒に考えてみようと思います。

お釈迦さまは、今から約二千五百年前にインドにお

生まれになりました。大変裕福な王様の世継ぎとしてお生まれになって、何ひとつ不自由はなかったんですが、長ずるに従い人生を深く静かに考えるお方でした。父親の王様は、それをひどく心配されて、お釈迦さまの気持をまぎらわそうと、いろいろな手段を試みました。またインドは暑い国ですが、夏と冬と雨季と三つの時節があるんです。王様は、お釈迦さまの為に三時殿を作ったといわれます。暑い時節には涼しい御殿に住ませ、寒い季節にはあたたかい御殿に、そして雨季には湿気のない御殿に住ませ、気持をなるべく開放的にするよう努力されたのであります。しかし、その効果はありませんでした。

ある時狩りに出て、しわくちやの老人をみつめました。お釈迦さまは、はじめて老人を見たのです。

お釈迦さまは、老人のしわくちやの顔をごらんになってびっくりなされた。そこで、「あれは何者だ」とたずねられた。家来は「あれは老人といって、年を取るとみんなああなるんです」と答えました。しかし、



お釈迦さまはそれを信じる事ができなかつたんです。次の日にまた同じ道を通って狩りに行きますと、老人は、息も絶え絶えに倒れておりました。「あれは何じや」とたずねられた。「あれは病人といつて、人間はいずれ病気になるます」……三日目には、すでに死んでおりました。「どうしたのだ?」「あれは『死』といつて、人間最後はみんなのちが尽きてしまうのです」と家来は申し上げました。

そこでお釈迦さまは生・老・病・死という苦がある事に気がつかれました。どうすればいいのかとご自身を問い詰められたんです。そして全てのものをお捨てになった。妻や子供を捨てて出家し、どうしたら年をとらないか、どうしたら病気にならないか、どうしたら、死なないか……。一生けん命考えられて、ある時はバラモンの仙人に教えを乞うたり、あらゆる苦行を重ねて模索を続けられたんです。しかし、お釈迦さまは自らの体を苦しめる事では遂に悟る事はできなかつたのです。



最後にどうなさったかと申しますと、静かに心を落ちて着けて禪定ぜんじやう三昧さんまいに入られて、この世の中は常に移り変わっているという事に気がつかれたのです。

生まれた子は三年たてば三歳になり、二十歳になれば大人として認められ、やがてお嫁さんをもらう。子供ができる。自分は年老いて死んでいく。常に世の中は移り変わる……。それを止める事はできないんだという事に気がついたんです。

諸行は無常であるという事を悟って、ならば人間がやらなければならぬ事は何かという事をお考えになりました。

生まれてくる。年を取る。年取る間に病気になる。やがては死ぬだろう。絶対にここから逃げる事はできません。この人と別れたくないと思っても別れなければならぬ。こんな顔見るのもいやだと思っても一緒にいなくちゃならない。これが何としても欲しいって言っても手に入らない。こんなものはもういらぬといふてそうはいかぬのです。人間には四苦八苦

といふて、四つの苦しみと八つの悩みがあるといいますが、これが娑婆しやばなんです。

お釈迦さまは、四十九年間……約半世紀にわたって悩み苦しみのある人々に説法なさいました。その説法がお経きやうであります。

タイやビルマ、セイロンの方の南方の仏教と、日本の仏教とは、伝わる間に大きく分かれたんですが、日本の仏教を大きな乗物と書いて大乘だいじやう仏教と申します。

南方仏教は小乗しょうじやう仏教、今は上座部じやうざぶ仏教と言って二百一十七の戒律を堅く守る修行が中心となっています。

私も曹洞宗には十六カ条の戒律があつて、上座部じやうざぶ仏教とは大変な違いだと思われるかもしれませんが、中身はそう変わりません。私は南方で修行してきまして、二百二十七の戒律を守りますから、これはどうしても、お坊さん自らが悟りをひらくという事が目的になります。そこが小さい乗物、小乗といわれるゆえんでして、日本の仏教は、お坊さんだけが悟るのではなく、みんなが一つの舟に乗るように救われたいと

願う大きな乗物……だから大乘仏教というんです。

日本に最初に入ってきたのが、天台、あるいは真言  
といつて、いわゆる密教でございます。簡単にいうと  
お釈迦さまの教えを行持する事に加えて、加持祈禱を  
中心とした修行を行つておりました。

それが鎌倉時代になりまして、人間はただお願ひす  
るだけではダメだ。自分がいかに生きべきかをつきと  
めようという事で禅宗が台頭し、今日まで来たわけ  
です。

道元禅師という方がおられますが、この方は三歳に  
して父上を失くして八歳にして母上を失くされました。  
皇族の一門で、大変な名家でありました。しかし、母  
上が、亡くなる時に遺言をなされた。「私は余命いく  
ばくもない。私はただひとつ願ひがあります。あなた  
は公卿の家柄に生まれたけれど、世に出て人の為にな  
りなさい。」こう言い遺されたんですね。わずか八歳の  
子供に、「世の為になる事をしてほしい。」「それには  
宗宗教家以外ない。」と言つて亡くなったというんです。

そこで道元さまは出家の決意をなさり、十三歳の時

に比叡山に登つて修行なさるんですが、やがて、どう  
しても解けない大問題にぶつかるのです。お経には、

「**顕密の二教共に談ず**。本来**本法性**、天然**自性身**」と。

若し此の如くならば、則ち三世の諸仏、甚に依つてか  
更に発心して菩提を求むるや。お経に、人間は本来仏  
だと書いてあります。本来仏ならばなぜ修行が必要な  
のか？これが道元禅師十四歳の時の疑問だったので  
す。この疑問を当時の高僧、名僧に質問したのですが  
納得のいく答を出してくれる人はありませんでした。  
そこで二十四歳の時、中国に渡つてご修行する事にな  
つたのです。

諸処方々の寺に登つてはみたものの、これぞという  
素晴らしい師匠様に会うことができず、一時はあきら  
めて日本に帰ろうかとも思われるのですが、そんな時  
ある一人の坊さんから、「こんどの天童山の住持とな  
られた如浄禅師は、お釈迦さまから五十代目の法を嗣  
がれたまことに傑出したお方だ」という事を聞いて、



天童山に登りはじめて如浄禅師に会われたのです。会ったその瞬間、道元禅師は、「これ人に会うなり」このお方こそこれまでさがし求めてきた正師、正しいお師匠様だと直感して、如浄禅師のもとで修行に励み、

ついに悟りを開かれるのであります。

道元禅師が坐禅堂で坐禅しておりますと、となりの坊さんが居眠りをしました。すると、如浄禅師がやって来て、はいていた履物をぬいでその坊さんを叩き、

「坐禅は身心脱落でなくてはならぬ」と申されました。この時道元禅師、豁然として悟られて、身も心も一切のとらわれから離脱する事ができました。

その後、道元禅師は二年間宋にとどまり、天壺山で修行を重ね、諸山を巡錫をして宝慶三年（一二二七）の秋、如浄禅師の嗣書を授けられて帰国するのです。

帰つてきて、あなたは中国で何を待て来たか？と問われた時に、当下に眼横鼻直なることを認得して人に瞞かれず。便乃ち空手にして郷に還る。所以に一毫の仏法無し」と申されました。空手にして郷に還る、「空手還郷」何も持っていない。空手、からっぽで、手ぶらだと答えたんです。何を悟ってきた。「眼横鼻直」なることを知ると申され、人間のありのままの姿、目は横にあり鼻はたてについているという事に気がついた。それが曹洞宗というものの根本の教えといわれております。悟りというと、大変な事のように思えるかもしれませんが、そう遠い所にあるもんじゃありません。毎日の生活の中にあるのです。「仏道をならう」というのは自

己をならうなり。自己をならうというは、自己をわするなり。自己をわするというのは、方法に証せらるるなり。」と申されております。本来の自己の面目をつきとめ、無我の行を實踐するのが仏道であります。

良寛和尚は「災難に会う時は、災難に会うのがよろし。死ぬる時は死ぬるがよろし。これ災難をのがるる妙法にて候」とおっしゃっておられます。ただそれになりきって生きる。一瞬一瞬を精一杯に受け止めて決して逆らわない。そうすれば自ずと道が開けてくるんです。

「ただわが身をも、心をも放ち忘れて仏の家に投げ入れて、仏の方より行われてこれに従いもて行くとき、力をも入れず、心をも費やさずして生死を離れ仏となる」と道元禅師は言われております。

いまを精一杯生きる事……。その為には、心に深く仏祖の行履を行じてゆく事があります。

本日は、本当にありがとうございました。

（横浜自強術の講演より）

